

---

# 仮面ライダーディケイド～ドラゴンボールの世界～

RYO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜ドラゴンボールの世界〜

### 【Nコード】

N0561M

### 【作者名】

RYO

### 【あらすじ】

世界を旅するディケイドが次にたどり着いた世界。

そこは7つ集めるとどんな願いも叶う球があるという夢のような世界だった？

## 「プロローグ 龍球の世界」(前書き)

2 作目となります

前作を読んだ方ダンテズインフェルノの世界じゃなくでごめんなさい  
こっちの方が書きたくなっちゃったんです  
いろいろと突っ込みどころは満載ですがどうぞ読んでください

## くプロローグ 龍球の世界く

「今度は一体何の世界なんだ？」  
士が呟く。

今回降りて来たスクリーンに描かれていたのは、

「ボール？ですかね。オレンジ色のボールが七つ。」

なつみが言う。確かに描かれているのは7つのボールだ。

そしてそれぞれのボールに1つから7つまでの星型が刻まれている。

「何の世界なのかな？ ボールだから球技でもするのか？」

ユウスケが楽しげに言う。

それに士がやれやれと言った感じで答える。

「そんなわけあるか。少しは考えて喋れ。」

「悪かったよ。でも一体何の世界なんだろう。」

ユウスケはなおも納得できないでいるようだった。

そんな二人へなつみが提案する。

「なんにせよ一度外へ出てみませんか？」

「なんだこれは？」

「おお。」

「うわゝ、なんでしようあれ。」

3人の驚嘆の声。

それもそのはず、なつみの提案で外に出た3人は遠くに街を発見。

兎にも角にもその街へと向かうことになりいざ到着してみるとみた

こともない景色が広がっていたのだ。

「車が空を、飛んでる。」

そう、そして、

「なんだ、この建物の形。変だな。」

「おい、あいつが投げたカプセルが変形して車になったぞ。」

要するにそういうことである。

彼らは今まで色々な世界を旅し、様々なものを見て来た。

その彼らが見たことの無い光景がこの世界には広がっていた。

「一体何なんだ、ここは。」

等と士が言っていると背後からの聞きなれた、しかしあまり聞きたくない声。

「やあ、士。困っているみたいだね。」

さも面倒くさそうに士が振り返る。

「海東。またお前か。何の用だ。」

「その言い方は無いんじゃないかな。困っている君達にこの世界の事を教えてあげようと思ったのに。」

するとユウスケが身を乗り出し海東に尋ねる。

「知ってるの？教えてよ。」

「いいだろう。この世界は、ドラゴンボールの世界だ。」

「「ドラゴンボール？」」「」

3人は声をそろえて言う。

「そう。ドラゴンボールだ。7つ集めるとどんな願いも叶うと言う、まさに夢のようなボールさ。」

「で、お前は这个世界でそのドラゴンボールを盗もつてわけか。」

「人聞きの悪い言い方はよしてくれよ士。」

僕が盗むんじゃない。お宝が僕に盗まれたがるんだ。」

「そうか、まあいい。大体わかった。」

で、お前はこれからどうするんだ？」

「それはもちろんこの世界のお宝、ドラゴンボールを手に入れるよ。」

そういうわけだ、じゃあね。」

海東は言い終わると颯爽と去っていく。

「ったく。あいつらしいな。」

よし、俺達も行くか。もう少しこのあたりを回ってみようぜ。」

士はそう言つとさっさと歩きだす。

「待ってくださいよ、士君。」

「待てよ士。」

士の後になつみとユウスケも続く。

## ～1幕 悟空登場～

街の散策を初めて30分ほど経った頃だった。

ボカアアアン！

突如爆炎と共に空飛ぶ車が一台落ちてくる。

それを合図にか他の車も次々と爆煙を上げながら落ちてくる。

街は火の海になった。人々が悲鳴をあげ逃げ惑う。

「一体何事だ。」

士はそう言い車達の落ちて来た空中へと目を向ける。

そこには空中を浮遊する黒いタイツを着たような姿の人型の怪人たち。

そいつらが空飛ぶ車に群がり破壊し、撃ち落としている。

「なるほどな、あいつらか。行くぞユウスケ。」

「ああ、士。」

二人はそう言うと言と変身すべくそれぞれの準備をする。

士はカードをバツクルに挿入。

「カメン、ライド」

独特の電子音声。

バツクルを閉じる。

「デイクライド！」

音声と共に士の体が特殊なスーツに包まれ頭上にマゼンタ色のプレートが現れる。

それが頭の定位置へ収まる、と同時に体を纏うスーツにもマゼンタの色が宿る。

異世界の戦士、仮面ライダーデイクライドだ。

士の変身が完了した。

ユウスケも既にクウガへと変身を終えている。

士が腰のライドブッカーを手に取り銃へ変形させる。

銃口を空飛ぶ黒タイツ怪人へ向け引き金を引く。

食らった怪人たちが火花を散らし地面に激突。直後に爆散。

「俺も行くぞー。」

ユウスケも手ごろな銃を手にとると体色が緑に変化。

感覚を強化し銃撃に特化したペガサスフォームだ。

クウガも引き金を引く。

こちらはディケイドと違い速射能力は低い。

だが命中率と一撃の威力は高く、怪人を確実に一撃で仕留めていく。と、敵の黒タイツの一団の中に姿の違う、例えるならゴキブリのような姿をしている。

敵の親玉らしかった。

そいつが翼から何か液体のようなものを飛ばし、避け損ねたディケイドとクウガがともに受け吹き飛ぶ。

液体を浴びると発火し、爆発するようだった。

「くっ。あれが親玉か。」

士が呟く。液体を浴びた胸からは煙を吹いている。

士は新たなカードを取り出しバツクルへ挿入。バツクルを閉じる。

「アタック、ライド プラスト！」

すると士の手に持つ銃が分裂し、無数の弾丸がゴキブリ怪人めがけ飛んでいく。

しかしゴキブリ怪人はこれを難なくかわし一気に士との距離を詰めると着地と同時にショルダータックル。

士は避け損ねまともにこれを受ける。

「ぐあっ！」

衝撃でゴロゴロと転がり受け身を取り、何とか膝立ちになる。

しかし膝立ちになったところへゴキブリ怪人の追撃の前蹴り。

士はたまらず後方へのけぞる。

追撃しようと怪人が歩を進める。

「士っ！」

そこへユウスケが駆け付け付けペガサスフォームのまま怪人を羽交い絞めにする。

しかしゴキブリ怪人はこれを難なく振りほどくと逃がすまいと撃つ  
ユウスケの銃撃も悠々かわし空中へ飛び上がる。

「くそ。ぶんぶん飛び回りやがって、ゴキブリはゴキブリらしく地面を這いまわってる。」

「ファイナル、フォーム、ライド　クククウガ！」

士が挿入したカードの音声が終わるや否やユウスケの変身したクウガに変化が現れる。

空中に浮いたと思ったら形を変え、その姿はクワガタムシを模した  
ものになった。

士がそれに飛び乗る。

「いくぞ、ユウスケ。」

ユウスケ扮するクウガゴウラムに乗った士は先に飛び上がったゴキブリ怪人めがけ飛翔する。

飛翔しながら士はライドブッカードをソードモードに変形。

ゴキブリ怪人へと斬りかかる。

しかし怪人はこれを難なく回避。

避けられた士は態勢を崩しながら怪人の脇を通り過ぎる。

そこへ怪人の液体攻撃。

士は受け切れず吹っ飛び、地面に墜落。

しかし、間一髪地面の所でユウスケがその背で受け止める。

「無事か、士。」

「ああ。なんとかな。」

そう言いながら立ち上がる士はまた体から煙を吹き、よろめいている。

そこへ怪人の追撃の突進。

しかしその攻撃がライダー達に当たることとはなかった。

怪人の攻撃が当たる寸前、脇を何かがかすめた。

それが怪人の胴へ命中し爆ぜる。

さらに士の脇を複数の光弾がかすめ、全て怪人へと命中。

怪人はたまらず落下する。

「なんだ？ 一体何が。」

驚いて振り返る士のもとへ近づく何か。

とつさに士は身構える。

「あれ？ オメエ誰だ？ こいつらと戦ってんのか？」

士のもとへ辿り着いた男が発した第一声がそれだった。

「オラてつきりクリリンか誰かが戦ってんのかと思ったんだがなあ。まあいつか。」

男は何やら一人ブツブツ言っている。たまらず士が尋ねる。

「おい。お前は何者だ？ 何故生身で空を飛んでいる。それにさっきの为一体。」

「ああ、悪いい。オラア孫悟空ってんだ。空飛んでるのは舞空術つつてな。」

とそこで先程怪人の落ちたあたりから液体が飛んでくる。

「つと、危ねえな。とにかく話は後だ。先にあれをぶっ飛ばすぞ。」

悟空と名乗った男は怪人の液体攻撃を難なくかわしそう言うと言つと怪人の元へ飛んでいく。

「ユウスケ。俺達も行くぞ！」

「あ、ああ。」

ユウスケと士も慌てて後を追う。

怪人は完全に防戦一方となっていた。

持ち前のスピードを更に上回るスピードで悟空が動くため、怪人はほとんど何もできずにただ殴られている。

「おい、これ、俺達の出番無いんじゃないのか？」

「うるさい、行くぞユウスケ！」

士が新たなカードを取り出しディケイドライバーに挿入する。

「ファイナル、アタック、ライド ディディディディケイド！」

音声の後ライドブッカーを剣状に変形させ構える。

士の眼前にはいつもの無数のカード群が現れている。

士とユウスケ扮するディケイドとクウガゴウラムはその中を信じられない速さで駆け抜けけるとすれ違いざま、

悟空が吹っ飛ばしたゴキブリ怪人の胴を横薙ぎに両断。

士達が怪人の脇を通り抜けるとほぼ同時にゴキブリ怪人を極太の気功波が襲う。

悟空のカメハメ波だ。

食らった怪人は跡形もなく消し飛んだ。

「なるほどな。大体わかった。」

地上に降りた悟空は同じく地上に降り、変身解除した士達と改めての自己紹介と情報の交換を行った。

それでわかったことだが、本来この世界には怪人はいない。

10日前突如として怪人は現れ世界を破壊し始め、彼ら地球の戦士たちはそれを阻止するため、

皆散り散りになって戦っているそうだ。

しかも、怪人の出現と同時に、集まっていたドラゴンボールが何処かへと飛び散ってしまい、

彼らは怪人の出現と何らかの関係があると考え、世界を守る傍らドラゴンボールの回収も行っているそうだ。

そして現在、悟空が2つ、ベジータとピッコロが1つずつの計4個が発見されている、とのことだ。

「じゃあ俺はこの世界でドラゴンボールつてのを7つ集めてこの世界の怪人を倒せばいいわけだ。

シンプルでわかりやすくていいな。

んで？まずは何をすりゃいいんだ？」

「そうだな、まずは街を守ってもらいてえんだ。

人出が全然足りなくてな。」

「そうか。いいぜ。」

と、言うわけで士とユウスケはこの世界を守るための戦士の一人となるのだった。

「今回私全然出番ないですね。」

と言っなつみの眩きは聞こえなかつたことにしよつ。

ゝ小休止 怪盗の苦難ゝ（前書き）

今回は海東の話となっています。

## く小休止　怪盗の苦難く

さて、場所は変わってここはブルマの家。  
今はこの家の主は外出していて留守だ。

その家に一人の男が忍び込んでいた。

「おかしいな、多分ここのはずなんだけど。」

海東だ。

彼はドラゴンボールを探知できるドラゴンレーダーの存在を聞き、  
忍び込んだのだった。

「レーダーによるとこの辺だね。」

ブルマの家で発見したドラゴンレーダーをもとに一番近くにあった  
ドラゴンボールの反応をたどり、岩場の多い荒野に来ていた。

歩くこと3時間。やっと目的の物を見つけた。岩でできた台型の上  
に乗ったドラゴンボール。

「見つけた。」

海東は小走りに近づく。そのときだった。

「何をしている。」

右手にある岩場の高台の上から声がする。

驚いて見上げるとそこには特徴的なM型の髪。

ベジータだ。

「それは俺の物だ。一体何をするつもりだったんだ？そもそもお前  
は何者だ？」

「僕は世界を股にかけるトレジャーハンターさ。」

「トレジャーハンター？要するに泥棒か。」

「人聞きの悪い言い方はよしてくれよ。僕はトレジャーハンター。

この世界のお宝を探している。」

海東はおなじみの指鉄砲のポーズをとる。指しているのはドラゴン  
ボールだ。

ベジータは腕を組むと答える。

「そのお宝つてのが、ドラゴンボールってわけか？」

「物わかりがいいと助かるよ。」

そう言うことだ。できれば黙って僕にukれると嬉しいんだけどな。」

「フン。そうはいくか。断る！」

「そうかい、なら、力づくしかないね。」

海東は言うと同時にいつの間にか右手に持ったディエンドライバーをクルリと一回転させ構える。

左手にはカード。それをドライバーに挿入する。

「カメン、ライド」

銃口を上に向け引き金を引く。

「ディッツエンド！」

音声と共に海東の体は特殊なスーツに包まれ上部から降ってきたプレートが頭にはまる。

それと同時に海東の纏ったスーツにシアンの色が浮かび上がる。

仮面ライダーディエンド。死（Die）と終わり（END）を司る戦士だ。

ベジータは腕を組んだまま見下ろすと言った。

「それがお前の戦闘服か。なるほどな、戦闘力が極端に跳ね上がった。」

ベジータは組んだ腕を解き、空中に浮遊するとそのまま海東の前にゆっくりと降り、音もなく着地した。

「準備はいいかい？」

海東はそう言うと一緒に間合いを詰め、銃で殴りつける。

ベジータは難なくかわすと裏拳で迎撃。

海東はそれをガードし今度は蹴りで攻撃。

ベジータはそれを受け止めると反撃。

二人の力は互角のようだった。

二人の拳が交錯しあい、蹴りが舞う。

と、ここで海東の放った銃弾をベジータがバク転で避ける。

二人の間に距離が生まれる。

「大口をたたくだけはあつて、やるな。」

「君もね。」

「だが俺の実力はまだこんなもんじゃない。」

ベジータはそう言うのと全身に力を込め、気を高めだした。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

次の瞬間ベジータの髪は金色になり、体の周りをバチバチと何かが言っている。

スーパーサイヤ人ベジータだ。

「なるほどね。じゃあ僕はこれだ。」

海東はカードを二枚取り出すとそれを順にドライバーに挿入。

「カメン、ライド      キックホッパー！」

パンチホッパー！」

引き金を引くと海東の目の前にそれぞれ緑と黒のライダーが現れる。

「見てよ兄貴。あそこに面白そうなのが居るよ。」

「お前はいいよなあ。キラキラ光っていて。その光、奪ってやるよ。」

「

二人は言うや否やベジータに襲いかかる。

まずはキックホッパーのキック。そしてパンチホッパーのパンチ。

ベジータはそれらを軽々とかわし、海東のもとへ一気に突っ込んだ。

「!!!」

不意を撃たれた海東は一瞬怯む。

その隙にパンチ、キックの嵐。フィニッシュとばかりに蹴り上げ。

食らった海東は空高く撃ちあげられる。

ベジータは更に追い打ちを掛けるべく飛び上がる。

「くっ！」

海東は空中で何とか態勢を立て直し上昇してくるベジータ目がけ銃撃。

しかし海東の銃撃は空撃ちに終わった。

ベジータは海東よりも更に高い位置にいくとそこからダブルスレッ

ジハンマー。

海東は何とかガードするが勢いは殺しきれず地面に高速で落下。

「がはっ！」

背中から地面に激突する。

「まだまだ！」

ベジータはそう言うつと両手をかざす。

その手から無数の気功波が海東めがけ撃ちだされる。

ドガドガドガッ！ドゴオオオオオオオオオン！！

大爆発。

キックホッパーとパンチホッパーも爆風に巻き込まれ消滅する。

「フン。」

ベジータは鼻を鳴らすとドラゴンボールを持ちその場を去った。

後には変身が解けてボロボロになった海東の姿だけが残った。

## く2幕 悪夢再び

「アタック、ライド プラスト!」

デイクイドの持った銃から無数の弾丸が打ち出される。

受けた黒タイツ達は地面に落ち、爆発。跡形もなく消える。

「超変身!」

クウガの超変身。パワーを高めたタイタンフォームだ。武器は剣である。

その剣を振り回し地上から攻め来る黒タイツ達をなぎ払っていく。黒タイツ達はひとたまりもなく爆発と共に消滅する。

悟空に頼まれこの世界を守る戦士となった彼らは二人でとある町の防衛にあたっていた。

戦う二人のもとへクワガタを彷彿とさせる怪人の親玉が現れる。

「あれが親玉だな。」

言うとはクワガタ怪人めがけ剣を構えて突進。

怪人は両手にクワガタの角のような刀を持っていてそれで土の剣撃を受け止める。

空いた方の手で土の胸を薙ぐ。火花が散った。

「ぐあつ。」

土は後方に大きくのけぞる。

なおも追撃してくるクワガタ怪人の攻撃を横転でかわすと手には新しいカード。

「そっちが虫なら、こっちも虫だ。」

「カメン、ライド クウガ!」

「虫言うな!」

今のはユウスケの悲鳴である。

ともかくクウガへとカメンライドした土は道端に落ちていた鉄パイプを左手に持つともう一枚カードを挿入。

「フォーム、ライド クウガ、ドラゴン!」

音声と共に赤かったディケイドクウガの体色が青く変化していく。スピードに重点を置いた、クウガ、ドラゴンフォームだ。さつき持っていた鉄パイプはドラゴンロッドへと姿を変えた。そこへクワガタ怪人が飛びかかる。士はそれをロッドで受け止め、相手の態勢を受け流して崩すとロッドで突きを繰り出す。最初の2撃は怪人の胸にヒットしたが3撃目を空中に飛んでかわすと怪人は戦法を変えたのか降りてこずに空中で刀を振り回す。すると衝撃波が発生し、地面を切り刻む。士はこの斬撃に巻き込まれた。

「うわあ！」

吹っ飛んだ士。それをユウスケ扮するクウガタイタンフォームが受け止める。

「大丈夫か、士。」

「ああ。俺達も飛ぶぞ。」

「えっ？」

ユウスケの疑問と同時に士がカードをバックルに挿入。

「ファイナル、フォーム、ライド      ククククウガ！」

「もういっちょ。」

「フォーム、ライド      クウガ、タイタン！」

今度は士がクウガタイタンフォームに変身し、元々タイタンフォームだったユウスケは剣を取り落としクウガゴウラムへと変形。

落とした剣を士が拾いゴウラムに乗る。ややこしい話である。

怪人の繰り出す衝撃波をかわしつつ上昇し、怪人と剣を交える。

ガキン！ガキン！

火花が散る。

5 撃目の攻撃の後士が跳躍。

怪人は上方の士に気を取られる。

ユウスケがその隙にゴウラムの角で怪人を挟む。

「！？」

怪人は驚き逃れようともがく。

「ハアアアアアアアアアアアアアア！！！」

士の大上段からの斬り下ろし。

受けた怪人はひとたまりもなく地面に落下する。

それに続いて士達も着地する。ユウスケは元のマイティフォームに戻っている。

「そろそろ、トドメと行くか。」

言うと士は左手に持ったカードをバツクルに放り込む。

「ハアアアア！」

ユウスケは右足に力を溜めている。

「ファイナル、アタック、ライド　ククククウガ！」

士は手に持った剣を構え直す。

ユウスケは跳躍し、士は剣を構えて怪人めがけ突進。

「ハアッ！！！」

二人の掛け声。

士のタイタンソードが怪人の胴を貫く。タイタンフォームの必殺技、カラミティタイタンだ。

ユウスケは怪人の顔面にとび蹴りを食らわせる。マイティフォームの必殺、マイティキックだ。

二人の必殺技を受けた怪人は、それでもなお爆発しない。

後方へよろよろとよろめいていくと、こんなことを言った。

「ザ…ザンキ様…バンザーイ！」

クワガタ怪人はそれだけ言うと後ろへと倒れそのまま爆散し、消滅した。

「ザンキ？一体…。」

変身解除した士が怪訝そうにしていると、同じく変身解除したユウスケが楽しそうに叫ぶ。

「士！あれ、みるよ。」

ユウスケが指さした方を見る。

「ん？あれは。」

そこにはオレンジ色の球。中には3つの星が描かれている。

「これって、ドラゴンボールだよな。」

恐る恐る、といった感じでユウスケが近寄り、ドラゴンボールを手取る。

「みたいだな。とにかく、持って帰るぞ。」

そう言い土は踵を返し言ってしまう。

「あ、おい、土！待てよ。」

慌ててユウスケも後を追う。

これで見つけたドラゴンボールは5つ目だ。

「気円斬！」

円盤状のカッターに練り上げられた気功波が敵を両断していく。食らった黒タイツ達は真つ二つになった後、爆散する。

「はあ、はあ、後少し。」

ここは土達が戦っていた場所より少し南に行ったところにある農場地帯。

その上空で世界を守る戦士達の一人、クリリンが戦っていた。時間的には土達が5つ目のドラゴンボールを発見する少し前、言うことになる。

「これで、ラストオ！」

クリリンがトドメの気功波を放つ。

最後の黒タイツが爆発する。

「よっしゃあ！」

クリリンは一人勝ち名乗りを上げる。

と、そこへ聞こえるはずのない、しかも、もしそうだとしたなら圧倒的な絶望を覚える声がした。

「よくもまあこれだけ、たくさん暴れてくれましたねえ。」

クリリンは戦慄した。震えが止まらない。  
震えながらも何とか振り返るとそこには、

「お…お前…は…。」

「おや、誰かと思えばいつぞやの虫けら君ではないですか。  
お久しぶりですねえ。」

「お…前…フリーザ…なんで…。」

「フッフ。そんなに恐がらなくてもいいじゃないですか。  
いいでしょう。私が何故この場に居るのか、特別に教えて差し上げ  
ましょう。」

確かに一度は死にました。しかし私は蘇ったのですよ。  
ザンキ様のお陰でね。」

「ザンキ?…一体…。」

「フッフ。あなたがそれを知る必要はありませんよ。  
何故なら、あなたはここで死ぬんですからあ！」

言うや否やフリーザはクリリン目がけ一直線に突き進むとその胸に  
拳を突き立てた。

「がはっ。」

胸を貫かれたクリリンが血を吐く。フリーザは刺さった腕を抜くと  
力なくダランとしたクリリンの体をゴミでも捨てるように地面に放  
り捨てた。

倒れたクリリンの体から血が流れ、大きな血だまりができる。  
しかしクリリンの意識は既に無かった。

同じ頃。

ここはクリリンの居た場所から東へ少々いったとある町。  
そこに居るのはトランクスだ。

それともう一人。

「お前…は…。」

トランクスが言葉を失う。

「フッフッフ。久しぶりだな。トランクス。」

私を覚えているかね。」

「セ、セル。」

「これは光栄だ。覚えていてくれるとは。」

「何故貴様がここに。あの時死んだハズだ。」

「確かに、私はあの時一度死んだ。しかし、蘇ったのだ。

ザンキ様のお陰でな。」

「ザンキ…だと？」

「そうだ。悪いがこれ以上教えることはできんぞ。私もザンキ様に仕える身なのでな。」

そこまで聞くとトランクスは姿勢を変える。

気を溜める態勢だ。

「はあああああああああ！！！！」

一瞬にして気を溜めたトランクス。その髪は金色に光り体の周りをオーラが包む。

「ほお。」

セルはそれを見て少しだけ感心したよう声を出した。

「お前が教えないと言うのなら、力づくで聞きだすまでだ。」

「できるかな？お前は既に一度私に負けているのだぞ？」

「あの時の俺と一緒にするな。行くぞ！」

そう言いトランクスは一瞬にして間合いを詰める。

信じられない速さだ。

しかし。

「なにっ！」

トランクスの渾身の突きはセルによって難なく受け止められた。

「フン、バカめ。貴様が強くなったように、この私もまた強くなったのだよ。

遙かにな！」

セルは言葉と共に空いた手でトランクスの腹に渾身のボディブローを叩き込む。

「が…がはっ！」

トランクスは空中で崩れ落ちる。

そこへ追撃の膝。

崩れ落ちていた顎めがけての物で効果は絶大だ。

トランクスの体は宙高く舞った。

「トオドオメエだア！」

そう言いセルは気を溜める。そしてたまった気を両の掌から一気に放出する。

「カメハメ波！」

セルの放ったカメハメ波はトランクスに寸分変わらず命中し、爆発。跡形もなく消滅した。

「フハハハ。ちょっとやりすぎたかな？」

セルは愉快そうに言うと言つとゆっくりと去って行った。

## く2重の悪夢く

「っ!？」

今度は悟空だ。悟空の守る街。

そこで戦いながら悟空は異変に気づいていた。

「クリリンとトランクスが、消えた……？」

彼はそれが事実なのか、一体何が起こったのかを確かめに行きたかったが今は敵の大軍団との戦闘の真つ最中で行くに行けない。

モヤモヤしたものを抱えながらも悟空は懸命に闘っていた。

と、そこへ、覚えのある気が近づいてくる。

「まさか！」

驚いてそちらへと振り向くとそこには、

「お久しぶりですね。」

「お前は、フリーザッ！」

「私も居るぞ。」

今度はさっきまで悟空が向いていた方向から声。振り向く。

「セル！」

「ごきげんよう。お加減はいかがかな？」

最も、これから最悪になるだろうがね。」

「なんでお前達がここに。」

「復活したんだよ。ザンキ様の手によってな。」

今度は後ろでフリーザが答える。

「じゃ、じゃあまさか、クリリンとトランクスが消えたのは。」

「そんな名前だったね、あの虫けら君は。」

「その通り。私がトランクスをやった。」

「オメエら！許さねえ！」

そう言うつと悟空は一瞬にして気を溜めるとスーパーサイヤ人へと変貌を遂げた。

「ぶっ倒してやる。」

それだけ言っていると悟空はフリーザのもとへ一瞬で距離を詰め蹴りかかる。トランクスよりも速い。

それをフリーザは何とか防ぐ。悟空が追撃しようと手を振り上げたその時。

「私も忘れてもらっては困るな。」

後ろからセルの肘鉄。腰に刺さる。

「あぐつ。」

今度はフリーザの前蹴り、そしてたたき落としの尻尾攻撃。

悟空は吹っ飛び地面に激突した。

その様子を楽しむかのようにゆっくりと降りてくる二人。

「フッフ、まだこんなものじゃないよ。ボクの復讐はね。」

「さあ、もっとこの私を楽しませて見せろ。」

悟空は絶体絶命のピンチに立たされた。

「おい、あれ！」

「わかってる。急ぐぞユウスケ。」

「ああ。」

士とユウスケはドラゴンボールを見つけ悟空の所へ戻ってきていた。その途中で悟空がどうやら戦っているらしい所を目にした。

「変身！」

「カメン、ライド     ディケイド！」

「変身！」

士とユウスケはバイクに乗ったまま変身するとアクセルを吹かした。向かうは悟空の救援。

ドガッ、バキッ！

悟空はなす術もなくセルとフリーザにボコボコにやられていた。セルの回し蹴り。悟空が吹き飛ぶ。

「そろそろ、トドメにしようかな。」

大分気も晴れたし。」

「そうだな。」

二人がそう言い悟空に近づいたその時。  
バアン！

フリーザの胸で何かが爆ぜた。

「なんだ！？」

驚いて弾の飛んできた方に目をやる。そこには二台のバイク。

士はセルに、ユウスケはペガサスフォームのままフリーザに突っ込む。

「ぐっ。」

フリーザは予想外の展開にクウガにはねられた。

地面をゴロゴロと転がりすぐさま立ち上がる。ダメージは少ないようだ。

「！？」

こちらは士。同じくセルを撥ねようとしたのだが、セルはこれを受け止めたのだ。

「ちっ。おとなしく轢かれろ。」

士はそう言いライドブツカーを銃の形にするとセル目がけ銃撃。

「ぐっ。」

受けたセルは怯んで後退。

しかしすぐに立て直すと手から気功波を打ち出す。

士は跳躍してこれを回避。

「よう。無事か？」

悟空の横に着地した士は悟空に尋ねる。

悟空は苦笑しながら答える。

「当たり前だ。これくらいのピンチ、しょっちゅうあるからな。」

そう言う悟空は口と頭から血を流し、服も所々破けている。とても大丈夫そうには見えない。

「おめえ達にどっちか一人任せてもいいか？」

悟空の言葉に士が答える。

「ああ、どっちがいい？」

「じゃあフリーザをオレが倒す。」

「フリーザってどっちだ？」

「あの緑のライダーを痛めつけているほうだ。」

ユウスケはフリーザにボコボコにやられていた。

「ちょっ、土、早く、ぐはっ。」

「ああ、悪い。」

能天気な土が返す。

しかし手にはカード。

「アタック、ライド　ブラスト！」

無数に分裂した銃身からこれまた無数の弾丸が撃ち出される。

それをフリーザは尻尾でガード。と、その尻尾をいつのまにか間合いを詰めていた悟空が掴んで振り回す。

「オラアアアア！」

フリーザは投げ飛ばされる。

土はすかさずユウスケに声を掛け、セル向かって走り出す。

「ユウスケ、行くぞ！」

「ちょ、待てよ土。」

言いながらユウスケは落ちていた棒を拾い上げ超変身。先程デイクイドクウガもなった、ドラゴンフォームだ。土の先制右パンチ。セルは首を傾けてかわす。

そこへユウスケのロッドによる突き。

それをセルは右手で軽々掴み止め、そのまま振り回す。

「うわあ！」

ユウスケは土を巻き込み吹っ飛ぶ。

「痛って、ユウスケ、俺を巻き込むなよ。」

そう言い起き上がった土の目の前にセルがいた。

「話している暇はないぞ。」

顔面目がけ蹴りが飛んでくるのを土は何とかブロックし、後方へ飛び退く。

すかさずユウスケのなぎ払い攻撃。

セルはこれをしゃがんでかわすと起き上がりざまに気功波を打ち出してくる。

ユウスケは避けきれずにくらい吹っ飛ぶ。

士は銃に変形したライドブッカードを撃つ。

しかしセルはこれを軽々避けるとニヤリと笑いながら言う。

「遅い遅い。そんなことでは当たらんぞ。」

士はそれを見て言った。

「なるほど、大したスピードだ。」

だが、スピードならこつちも負けて無いぜ。」

新たなカードを取り出す。

「変身！」

「カメン、ライド」

声と共にバツクルを閉じる。

「ファイズ！」

士の体に赤い線が刻まれる。

次の瞬間その姿は仮面ライダーファイズへと変身を遂げる。

すかさずもう一枚のカードを挿入。

「フォーム、ライド    ファイズ、アクセル！」

ファイズの胸のアーマーが開き色も変化する。

それを見たセルが感嘆の声を上げる。

「ほお、面白いな。」

「もつと、面白くしてやるぜ。」

士はそう言い腕のスタータースイッチを押す。

「start up」

音声と共に士の姿は消えた。

次の瞬間セルの体が大きくのけぞる。

それも何度も。

セルは食らいながらも気を溜めるとなんとかバリアーを張った。そのバリアーをまともに受けた士が火花を散らせながら現れる。

「ぐああ！」

「3 / 2 / 1 time out」

転がり終わると土のアクセルフォームの変身が解ける。

「はあ、はあ、やってくれる。」

セルは肩で息をしている。相当なダメージだったようだ。

ドガガガガ、バキツ、バキツ、ガツ、シュツ！

先程からずっと戦い続けているのは悟空とフリーザ。

二人の力はほぼ互角で消耗戦の様相を呈していた。

「はあ、はあ、やるね。」

「おめえもな。」

そう言つとまた二人の姿が消える。

あちこちで岩や建物がガラガラと音を立て崩れる。

しかし思ったほど長期戦にはならなかった。

悟空が更に気を溜め始める。

「はあああああ！」

先ほどよりも更に大きなオーラを纏ったスーパーサイヤ人2の孫悟空だ。

「な、何！？」

驚いたフリーザは一瞬怯む。

その隙を逃さず悟空は間合いを詰めフリーザの懐に入るとしたからフリーザの顎目がけひじ打ち。

フリーザを上空高く撃ちあげる。

「トドメだ！カメハメ波ー！」

悟空の手から打ち出されたカメハメ波は見事にフリーザに命中し大爆発を起こす。

フリーザが大爆発する所を見た土は、

「さてと、こつちもそろそろ決めるか。」

と言いカードを取り出す。姿は元のディケイドに戻っている。

「ファイナル、アタック、ライド」

「させるか！」

セルはそう言い土目がけ突っ込もうとする、が、バキーン！

突如として撃たれ動きが止まる。

見るとそこにはいつの間に超変身したのかペガサスフォームとなつたクウガがいた。

「土！」

「ああ。」

土がバツクルを閉じる。

「デイドイドイドイド！」

土の眼前に無数のカード群が現れる。

土は跳躍。そのカードの中へ身を躍らせる。

銃撃を受け怯んでいたセルはかわせずまともに食らう。

そして爆発。

着地した土の下にユウスケと悟空がやってくる。

「やったな土。」

「おめえ、本当に強えな。あのセルを倒しちまうなんて。」

等と言っていると。

「私の誇る戦士達を倒すとは、やってくれるな。」

よく通る、ドスの利いた声。それが後方から聞こえる。

3人はすぐに振り返る。

そこに居たのは、黒タイツ、しかしその体は鎧に包まれ背にはマントまである。

「お前がザンキか。」

土の問いにザンキが答える。

「いかにも。よくもやってくれたな。」

だがまあいい。また作ればいいだけの話だからな。」

「何の話だ。」

ザンキはそれには取り合わず自分の話を始める。

「孫悟空、貴様のドラゴンボールを持って来い。」

「おめえ、何言つてんだ？」

「私の言うことがわからんのか、ドラゴンボールを持ってこい。そうすればこの世界を破壊し、新たに創造する。そして私がこの世界の神となるのだ。」

おとなしく持つてくれば貴様らを神の直属のしもべとしてやるぞ。」

「いちいち勘に触るやつだな。俺は誰にも仕える気はない。」

士はそう言い剣を構え走っていく。

しかし士の一撃は簡単にザンキの手で止められカウンターを食らう。食らったのは一撃だがそこから派生したかのように火花が士の全身を襲う。

「うああああ！」

「士！」

吹っ飛んだ士は変身が解け、気を失った。

それを見たザンキはおもむろに手をかざすと地面から何やら盛り上がりが見える。

それが形を成していく。その姿は。

「そんな。」

「あれは。」

ユウスケと悟空がそれぞれ驚きの声を上げる。

その姿は先程彼らによって倒されたセルとフリーザのものだった。

「全く貴様らは、次は無いと思え。」

「はっ、申し訳ありません。」

セルとフリーザはひざまずくと謝罪を口にする。

「まあいい。帰るぞ。」

「はっ。」

ザンキは言うつと踵を返す、しかし念を押すためかもう一度言った。

「ドラゴンボールを持ってこい。いいな。」

それが正しい選択だ。」

それだけ言つとザンキはセルとフリーザを伴って北の方へと飛び去って行った。



ゝ小休止2 怪盗の喜びゝ (前書き)

なんか今回2とか多いです。  
許してやってください

## く小休止2 怪盗の喜びく

「やられっぱなしじゃ終われないからね。」

海東はベジータに負けて意識が戻ってから別のドラゴンボールを求めてさまよっていた。

先程の戦闘のせいでドラゴンレーダーは壊れてしまったので今は当てもなく彷徨っているだけだ。

しかし当てもなく彷徨ってちょうど3時間が経ったころ。

「僕は運がいい。」

やつぱりお宝に好かれているみたいだね。」

「なんだお前は。」

「君こそなんだい？緑色の怪人なのになんで怪人と戦っているんだい？」

「フン、よく言われるよ。俺はピッコロ。それでもこの世界を守っているんだ。」

「そうかい。まあそんなことはどうでもいい。」

海東はそこで一度言葉を切りピッコロの背後の岩の上に置いてあるドラゴンボールを指さすと言った。

「僕はそこのお宝に興味があつてね。できれば黙って差し出してくれるとありがたいんだけど。」

指鉄砲のポーズでドラゴンボールを指す。

「悪いな、断る。」

「なら仕方ない。」

海東はディエンドライバーを取り出す。

「カメン、ライド ディッツエンド！」

変身した海東を見てピッコロが言う。

「ほお、お前も仮面ライダーとか言うやつか。だが悟空が言つてたのとは違うみたいだな。」

「まあね、僕は士とは違う。」

海東はここで新たなカードを挿入。

「緑には、緑だ。」

「カメン、ライド　ギルス！」

引き金を引くと海東の眼前に仮面ライダーギルスが出現。

「うおおおおおおおおおおお！！！」

ギルスは雄叫びを上げるとピッコロめがけ突進。

ピッコロはかろうじて回避。すかさずカウンター。

しかしギルスは怯まずになおも追撃してくる。

ピッコロはそれをかわしつつカウンターを叩き込む。

と、ここでさっきまでいた場所に海東が居ないことに気がつく。

「まさか。」

驚いて振り返ると案の定そこにはドラゴンボールを抱えた海東が居た。

「悪いけどこれは頂いて行くよ。」

「待て！まだ決着はついてないぞ！」

海東は新たなカードを取り出す。

「僕にとって優先すべきはお宝の回収でね、君との決着なんてどうでもいいのさ。じゃあね。」

「アタック、ライド　インビジブル！」

海東の姿が消えていく。

「まで！卑怯だぞ。」

「よく言われるよ、でもこれが僕のやり方でね、君はギルスとでも遊んでなよ。」

ギルスがピッコロに襲いかかる。

ピッコロはかわしざまに気功波を打ち出す。ギルスは消滅した。それを確認もせず空中に浮かびあがると辺りを見渡す。

「くっ。」

しかし辺りに人影は無かった。」

ゝ終幕 神との戦いゝ（前書き）

中二病でスイマセン

## く終幕 神との戦いく

「…かさ…土！」

「ん、うつ…。」

「あ、よかった。目を覚ましたんですね、土君。」

「なつみかん…それにユウスケ…ここは？」

土は起き上がると二人に尋ねた。

「ここは写真館ですよ。」

「倒れたお前を悟空が運んでくれたんだ。」

「悟空は、あいつはどうしてる。」

「今は居ない。なんでも仙豆って言うのを取りに行ってるらしいんだ。」

「仙豆っていうのは食べればどんな傷も治ってしまうっていう不思議な食べ物らしいですよ。」

なつみがユウスケの説明を補足する。

それからユウスケが土が倒れた後の事を説明する。

「なるほどな、大体わかった。ならさっさとザンキを倒しに行くぞ。」

そう言い土はよろしながら立ち上がると外に出ようとする。

「あ、まだ駄目ですよ土君。悟空さんが戻ってくるまで休んでないと。」

「それなら心配ない。もう帰ってきてるぞ。」

土の声と同時にドアが開き悟空が入ってくる。

「土、おめえもういいのか？」

「お前が土か。」

悟空の後に続いてベジータが入ってくる。

「誰だ？お前。」

土が尋ねる。

「俺はベジータ。自己紹介している暇はない、さっさと仙豆を食え。」

行くぞ。」

そう言い仙豆を突き出すベジータ。土はそれを受け取ると口の中に入れる。

するとみるみる傷が回復し、疲労まで取れた。

「へえ、こりやすげえ。」

手を握ったり開いたりして自分の体の具合を確かめる。

「おし、治ったみてえだな。じゃあ、行くか。」

「ああ。」

それから土とユウスケはバイクにまたがり、ベジータと悟空は空を飛んでザンキのアジトへと向かった。

「おい、あれじゃないか？」

ユウスケが言う。

ザンキのアジトは一目見ただけでそれとわかるほど巨大な要塞だった。

むしろ何故今まで気がつかなかったのかおかしいくらいだ。

「要塞だな。」

「おゝ、スゲエ数の怪人だ。」

ベジータと悟空がそれぞれ言う。

彼らにはもう要塞の中まで見えているようだ。

要塞につくと怪人たちは手を出すなど言われているのか恨めしそうにこつちを見るだけで何もしてこない。

そのまま4人は大広間へと入っていく。中心には玉座がありザンキがそこに居る。

ザンキは椅子にふんぞり返ったまま言った。

「フハハハ、来たか。ドラゴンボールは持ってきたかね。」

悟空が前に出て答える。

「残念だが持つてきてねえ。」

それを聞いたザンキは傍目から見てもそれとわかるほどあからさまに不機嫌になって言った。

「ならば一体何をしに来た。」

今度は土が喋る。

「お前らを倒しにだ。」

それをきいたザンキは笑いだす。

一通り笑った後でこう切り出す。

「倒す？この私を？」

私はこの世界の神となる存在だぞ？それを倒すだと！？

冒涇もいいとこだ。」

ザンキの言葉を遮るようにベジータが割って入る。

「神だと？何が神だ。お前はただの人殺しだ！」

それを聞くとザンキは立ち上がり言った。

「人殺し？バカな奴らだ。どの道生き返らせるのだ。

何人殺そうが問題無かるう。」

ザンキの言葉に今度は土が答える。

「バカはお前だ。一度世界を滅ぼし新たに創造する？

世界はお前のおもちゃじゃない。

世界は、こいつ等は、今も懸命に生きているんだ。

それを邪魔する権利はお前達には無い！」

「貴様、一体何者だ！」

「通りすがりの仮面ライダーだ。

覚えておけ。」

「よかるう。貴様らは神に反逆したのだ。反逆者には死あるのみ。

皆の者出あえ！反逆者どもを皆殺しにしろ！」

ザンキの声に応えるようにさっきまで見ていただけの怪人たちがその眼に明らかな殺気を宿らせ大広間へと殺到する。

「行くぞ、皆！」

「「「おう!!!」」」

士の声に3人が答える。

「「変身!」」

「カメン、ライド　ディケイド!」

「「ハアアアアアア!」」

士とユウスケがそれぞれ仮面ライダーに、

悟空とベジータはスーパーサイヤ人になった。

ザンキの左右にはいつの間にかセルとフリーザが居る。

「たああああ!」

ユウスケが真っ先に突撃。大広間に殺到した怪人たちの中へ身を躍らせる。

寄ってくる怪人をユウスケな殴り飛ばし、蹴り転がし、殴られ、蹴られ、投げ飛ばし、斬られ、殴り返している。

悟空とベジータの二人はそれぞれセル、フリーザと対峙し、空中へ浮き上がる。

「あなたは私に一度成す術もなく負けているのですよ?」

「それがどうした。あの時の俺と一緒にするな!」

ベジータはそう言い一気に突進。

言うだけあって二人は互角の戦いを繰り広げている。

ベジータが裏拳を放てばフリーザはしゃがんで避けすぐさま尻尾で反撃、

ベジータはそれをかわすと今後は蹴りで攻撃、どんどん続く。

「行くぞ、セル!」

「来い!」

悟空とセルの戦いも始まった。

こちらもほぼ互角。

一方こちらは士vsザンキ。

勝負は圧倒的だった。

士の攻撃を易々と受け止めカウンターを叩き込み、蹴り飛ばす。士は防戦一方となった。

「超変身！」

ユウスケはタイタンフォームに変身。襲い来る怪人たちを薙ぎ払い、斬り、突く。

食らった怪人の一部は耐えきれずに爆散。

しかし何分数が多い。

遠距離から蜘蛛型怪人の糸による攻撃。

ユウスケは捕われる。

すかさず他の怪人たちが殴り、蹴り、斬ってくる。

衝撃で糸が切れユウスケは吹っ飛ぶ。

「くっ。」

ユウスケはすぐさま起き上がると剣を構え直しまた怪人の群れの中へと斬り込んでいく。

「はあ、はあ。どうした。大口を叩く割に大したことないぞ。」

「あまり調子に乗るんじゃないよ。」

フリーザは言うべジータ目がけ突撃。

ベジータはそれをかわし蹴り上げ。上空高く撃ちあげた所を気功波で追撃。

フリーザは態勢を立て直し、それを手で弾く。

両手を使いガードがから空きになったボディにベジータ渾身の蹴りが決まる。

「ゲフツ。」

怯んだ隙にアッパー、顎が上がったところにストレート。

「くたばれえ！」

ベジータのラッシュ。フリーザはもはや成す術なく殴られている。ラストのかかと落とし。

「これで、トドメだあ！ファイナルフラッツッシュュ！！！」

ベジータの両手から黄色い光線がフリーザめがけ一直線に飛ぶ。そして命中。爆発が起こる。

「そ、そんなバカなああああ！」

フリーザは完全に消滅した。

「オラァ！」

「ぐふっ。」

悟空の蹴り上げが炸裂、セルは空高く打ち上がる。

「カメハメ波ー！」

「な、なんだとおおおおおおー！！」

悟空のカメハメ波が命中しセルも爆発。跡形もなく消滅した。

「士！こっちは片づけた！」

そう言い士の方を向く。

士はと言うと何とかザンキの攻撃を凌いでいるという状況だ。

「ぐっ、わかった。ユウスケの援護を頼む。こいつは俺がやる！」

「わかった。」

そう言い悟空とベジータは戦っているユウスケのもとへと飛んでいく。

「フン！バカめ。おとなしく救援を頼めばいいものを。貴様の死は決まったぞ。」

「それはどうかな。」

士はそう言うところザンキの攻撃を大きく横転しかわし距離をとる。

手にはケータツチ。

「な、何だそれは。」

士は構わずボタンに触れていく。

「クウガ、アギト、リュウキ、ファイズ、ブレイド、ヒビキ、カブト、デンオウ、キバ！」

呼び出し音が鳴る。

「ファイナル、カメン、ライド　ディケイド！」

士はバックルを外しケータッチをはめる。

その姿は全てをコンプリートした最強の存在、コンプリートフォームへと変貌する。

「行くぜ。」

剣をいつもの動作で構えるとザンキに突進。さっきよりも速い。

ザンキは慌ててパンチを繰り出すが、すれ違いざま斬撃を浴びる。

振りかえりざまにもう一閃。返す刀でさらに追撃。火花が散り、ザンキは吹っ飛ぶ。

それを見た士はケータッチのボタンを押す。

「アギト！　カメン、ライド、シャイニング」

音声の後士のすぐ横に仮面ライダーアギト　シャイニングフォームが現れる。

そしてカードを挿入。

「ファイナル、アタック、ライド　アアアアギト！」

士が剣を構えるとその動きに追従するようにアギトも動く。手にはシャイニングカリバー。

「はあ！」

士とアギトが剣を振るとそこから衝撃波が生まれザンキめがけて飛んでいく。

その衝撃波は見事ザンキを切り裂いた。

「わ、わた…しは…神に…」

ザンキはそれだけ言うのと膝から崩れ落ち爆発。

衝撃で要塞が崩れ始める。

「おい！悟空、ベジータ、ユウスケ、脱出するぞ。」

「…おう！」

三人に声を掛け一気に要塞の中を駆け抜ける。

すぐ後ろでは天井が崩れ落ちている。

士達4人は駆けた。

ゝ終幕 神との戦いゝ（後書き）

どうだったでしょうか。

後半は仮面ライダーらしくあっさりさせてみました。

その後の展開は予想通りだと思います。

スイマセン

くエピソード 怪盗の苦難2 次の世界へく（前書き）

いやホント、ネーミングセンスなくてスイマセン

## くエピソード 怪盗の苦難2 次の世界へく

「無事脱出だ。次は何をするんだ？」

脱出した士が最初に言ったのはこれだった。

背後では崩れた要塞の残骸から煙が立ち上っている。

「ドラゴンボールを集める。皆を生き返らせてやらなくちゃならねえからな。」

その問いに悟空が答える。

4人は手分けして残ったドラゴンボールを探しに出発した。

一方こちらはドラゴンボールのうちの一つを手に入れ意気揚々と歩いている海東。

「これがドラゴンボールか、きれいだな。」

などと言っていると、その手からボールが消える。

「海東、これはもらっていく。」

「なっ、待ちたまえ士。それは僕が苦労して手に入れたドラゴン。」

「うるさい！所詮盗んだものだろうが。とにかくもらっていくぞ！」  
海東の言葉を遮り士はそれだけ言う走り去る。

「待ちたまえ！士、それは僕の。」

海東はなおも追いつがる。その時上空から声がした。

「やっと思つたぜ。泥棒野郎。さっさと返してもらおうか。」

ピッコロだ。どうやらずっと探していたらしい。

「全く、しつこいね、君も。」

「ちょうどよかったじゃないか、キツイお仕置きをしてもらったんだな。」

士はそう言い去ってしまう。

「なっ、待ちたまえ士！」

「待つのはダメエだ泥棒野郎。」

海東がその後またもやボロボロにされたのは言うまでもない。

その後の話を少ししておくと、と言ってももう大体想像通りなんだが。

とにかく集めたドラゴンボールで今までに怪人に殺された人々を蘇らせた。

もちろんクリリンやトランクスもだ。

それでめでたしハッピーエンドと言うわけだ。

そんなわけで俺達は悟空達と別れ新たな世界に来ているわけだが…。

「なんだこりゃあ。」

スクリーンに映し出されたのは…。

この話はまた今度しよう。とにかく俺達の冒険はまだまだ続きそう  
だ。

くエピソード 怪盗の苦難 2 次の世界へく（後書き）

はい。というわけで予想通りの展開でしたく  
感想くれるとうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0561m/>

---

仮面ライダーディケイド～ドラゴンボールの世界～

2010年10月11日05時02分発行